

2024年(令和6年)3月31日発行

No. 19

公益社団法人 日本山岳会 山形支部

支部長 鈴木 理夫

事務局 〒997-0752

鶴岡市湯田川乙 35 河口 昭俊 方

メールアドレス : ymg@jac. or. jp

編集 : 日向 稔也



目次

1	支部長あいさつ	No.11637	鈴木 理夫	P 1
2	新会員紹介	No.17109	菅野さゆり	p 2
		No.17123	加藤美智	p 2
		No.17125	丹野浩之	p 3
		No.17167	神戸佳子	p 3
3	今年度の活動報告			
	天元台を滑る会	No.16798	沼部ひろみ	p 4
	月山春スキー	No.15526	武田幹男	p 5
	蔵王害虫被害調査登山	No.15137	野堀嘉裕	p 6
	宮城支部との交流会	No.17125	丹野浩之	p 7
	東北・北海道地区集会	No.15785	佐藤一広	p 8
	古道調査・道智道	No.16462	日向稔也	p 9
	それぞれの上高地	No.10786	田邊信行	p10
		No. 8494	安井康夫	p11
		No. 7734	木村喜代志	p13
	清掃登山・芋煮会	No.16462	日向稔也	p15
	支部晚餐会	No.16462	日向稔也	p16
	樹氷原を滑る会	No.16797	沼部貞治	p17
	学校から見える山	No.11637	鈴木理夫	p18
4	特別寄稿			
	加茂地区風力発電、撤回の取り組み	No.12118	梅本幸巳	p21
	蔵王に「地藏山」と「地藏岳」の2座!?	No. 7734	木村喜代志	p26
5	山形支部活動記録			p28
6	支部会員の活動状況			p29



支部長あいさつ

支部長として三年目を終えようとしていますが、今年度は新型コロナ感染拡大以降初めて、全ての山行を予定通り実施することができました。「月山春スキー」、「それぞれの上高地」、「宮城支部との交流会」、「東北北海道地区集会」は昨年度まで実施・参加できず、あるいは制限の中で行わざるを得なかった行事でした。コロナ以前の日常が戻ったことを改めて実感するとともに、ご協力に感謝申し上げます。本部晩餐会へも私を含め会員3名、会友3名の方が出席することができました。日本山岳会の利点である他支部との交流が復活できたことを、喜びたいと思います。



4名の新入会員を迎えることができたことは、今年度の特筆すべき点です。新入会員の方の各種行事への参加により支部活動を活性化することができました。また、その中で3名の方が女性であったことも重要な点です。山形支部の課題は高齢化、会員数の減少とともに、女性会員が少数であることでした。日本山岳会は初めて女性として橋本しおり会長が就任し、新しい時代を迎えました。山形支部の活動に男女の差があるわけではありません。むしろ、これからの山形支部を考えていく上で、女性の存在はより大きくなっていくものと思われまじし、会員拡大の可能性があると考えられます。

夏の酷暑と冬の雪不足も強く印象に残りました。特に庄内地域はフェーン現象が続き、全県的にも外出をためらうほどの暑さで、標高の低い山に登ることが危険な状態が長期間続きました。温暖化の影響が考えられますが、今年ほど雪が降らなかった年も記憶にありませんでした。通常期間の営業が可能なスキー場は、標高の高い場所に位置するものに限られ、このような状態が続くと条件に恵まれないスキー場の経営持続が困難になっていくことが懸念されます。今後温暖化や少雪が県内の山に与える影響について、注視していく必要があると考えられます。積雪の少なさへの懸念がありましたが、1月の「樹氷原を滑る会」は新雪にも恵まれ幸いにも無事開催することができました。

来年度を見据えて、今年度諸般の事情により実現できなかった課題等を挙げておきます。「学校から見える山」の寄贈活動は、吾妻から蔵王の展望図の校正を終え、資金的な目途も立ちつつありますので、印刷・贈呈を進めることができそうです。「学校から見える山」の展示活動は山形支部としての広報活動の意味もあり、来年度は是非実現したいと思います。支部報の年2回発行は会員への活動報告の意味も含め、実現していきたいと考えています。

新入会員の増加は来年度も最重要課題になります。周囲で興味・関心のありそうな方には是非加入をお勧めください。来年度の新しい課題としては、本部の設定によりGoogle Workspaceの運用が始まります。IT化を進めることで、支部活動の事務作業の省力化・経費節減や情報共有が図れると思いますが、軌道に乗るまでご協力の程お願いいたします。

長らく支部会員でありました高橋英彦元会員がご逝去されました。東北公益文科大学教授のかたわら、水彩画で鳥海山など山のある風景を描かれました。ご冥福をお祈りいたします。最後になりますが、昨年12月の本部晩餐会にて大場貞吉会員（1973年入会）が新しく永年会員となる表彰が行われました。改めてお祝いすると共に、支部活動への半世紀に渡るご貢献を称え支部長のあいさつといたします。

新会員の紹介

「いつの間にかハマった、周りがハマた？山登り」

会員番号 17109 菅野さゆり

2023年4月に入会いたしました菅野さゆりと申します。どうぞよろしくお願いいいたします。さて、私が人生で初めて登山をしたのは宮城県の御駒山でした。中学1年の学年行事で蒸し暑い雨の日でした。雨の中の濃い緑色の景色と、濡れた草に足を取られながら苦戦した苦い記憶が、断片的に思い出されます。二度目は、中学2年の学年行事での月山登山でした。大雨でした。月山の雨はとても冷たく、使い古した自転車通学用の雨合羽は意味をなさず、大変みじめな気持ちになりました。底の薄い運動靴もビショビショに濡れ、ふやけた足の皮が剥けてしまいました。「もう2度と山には登らない！」と心に決めた出来事でもありました。しかし、その後大人になった私は何度山に登ったことでしょうか。

凜とした朝の空気、風の渡る音、咲き誇る可憐な花々、トワイライトタイムの美しい空の色、山頂が見えた時のワクワク感、山小屋が見えた時の安堵感、1日の山行を終えた後の冷たいビール、ヘリコプターの音の緊張感…そして、山の先輩方は私に生き方を教えてくれます。山は私の人生に彩を与えてくれる、なくてはならないものとなっています。



子育てを終えて

会員番号 17123 加藤美智

子育ても終えて、山登りや、山スキーをはじめたいと考えていたときに、鳥海山で粕谷さんに出会い、お話を伺って、会に入会することになりました。

今年の冬は雪が少なかったのですが、山スキーの仲間に入れてもらったりして、初心者ながらもなんとか経験値を重ねることが出来ました。

怪我をしないように、積極的に前向きに上達できるように、スキー仲間と一緒に楽しみたいです。

この一年、上高地や天元台スキー場を滑る会に参加して、ようやく会の皆さんと楽しい時間を共有させていただくことができました。

今後も会の皆さんとの山行を通して、たくさんのことを学んでいきたいと思っております。



山も海も冬も夏も

会員番号 17125

丹野浩之

皆様はじめまして。この度、新しく入会させていただきました丹野と申します。山に登るようになったのは高校生の時に登山部に入ったことがきっかけで、現在まで続いております。また、登山部のときにお世話になった顧問の先生が粕谷先生であったこともとても幸運でした。

現在は「漕快亭」というお店を営んでおり、冬季間に蔵王の樹氷・氷瀑を見学するツアーのガイドを行っており、春から秋にかけてはカヤック、SUP（スタンドアップパドルボード）の体験を提供させて頂いております。また、NPO 法人として寒河江市のグリバーさがえ、葉山市民荘の指定管理もさせて頂いておりますので、お気軽にお立ち寄り頂き、水遊びの体験などで遊んで頂いたり、市民荘でご休憩頂ければ幸いに存じます。

土日祝日は仕事になることが多く、山岳会行事に参加できないことも多くあるかもしれませんが、宜しくお願い致します。



山の楽しみ方、もっと知りたいと思います

会員番号 17167

神戸佳子

2023年11月に入会させていただきました神戸佳子と申します。日本国への登山、そのあとの晩餐会とで初めて皆様にお会いできて、伝統ある山岳会の一員になれたこと感謝するとともに、その場にいることに自ら驚いているところです。

10年前までは登山というものには全く縁のない日々でした。あるとき友達に誘われるまま、スニーカーで月山に登り、やっと登山靴を買って鳥海山に登り、低山や名も知らぬ山に登り、だんだんと装備・道具類も増えてきたころに、冬の蔵王・お釜刈田岳へ連れていかれました。運よく天候に恵まれ、最高の景色と静寂の中をザクザクと氷を踏みながら進む音のみが響き、圧倒的な冬山の美しさに感動し、すっかりハマってしまいました。あのときのような景色と感動をまた味わいたいと、その体験をもとに山に登っています。まだまだ登った山は少ないですが、これからどんな山と出会えるのか楽しみです。

一番好きな山は、立山連峰。趣味のマラソン大会で立山の雄姿を眺めながら走るのは年に一度の楽しみです。そして次の日には実際にピークまで登って、これが自分なりの完全制覇で・・・自己満足ですが大好きです。

これからまた違った山体験があると思うとワクワクしますが、年齢と体力に沿って、じっくりチャレンジしていこうと思っています。なにとぞご指導のほどよろしく願いいたします。



今年度の活動報告

西吾妻ブルー『天元台を滑る会』

会員番号 16798 沼部 ひろみ

山形支部の行事で県南部へ行く機会が少ないと伺ったので、西吾妻天元台にある米沢山の会「大笠山荘」をベースに《山スキーと登山を楽しむ》を支部長・事務局長に提案いただき計画いたしました。

天元台は西吾妻の登山口として、ロープウェイとリフトを利用し、日本百名山「西吾妻山」へ四季を問わず賑わう山です。

初日（3月18日（土））の行動は、（土）道の駅米沢に集合し共同食料を配り、各々車で白布湯本駅へ。ロープウェイで標高1350m天元台にある大笠山荘到着。昼食にカレーうどんを作り、食後ゲレンデで自由にスキートレーニング。夕食は米沢牛芋煮・天ぷら・小松菜の煮物・冷たいつけ麺、そして皆さんの土産の銘酒が並び懇親会は大いに盛り上がり、いつの間にか夜は更けていくのでありました。

2日目（3月19日（日））快晴。昨日の重たい湿雪は夜半から気温が下がり、稜線の雪質はウィンドバック気味のパウダーに変わりました。朝食後リフト3本乗り継ぎ、登山口でスキー組7名はシールを貼り、登山組3名はスノーシューを履き稜線を目指して出発。

9:10 リフト終点1800mーカモシカ展望台ー中大巔ー9:40 人形石1963m到着。記念写真を撮り登山組は来た道を下山、スキー組は中津川源頭方面へ滑り、途中からトラバースしながら1900m付近からリフト終点へ滑り降りました。

人形石から稜線を見渡せば、東吾妻へ続く縦走路・一切経・磐梯山の雄姿が見え、西には飯豊連峰が輝いてありました。



月山春スキー
《わたしは、72歳。“山スキー”ははじめました》

会員番号 15526 武田幹男

私は、粕谷さんからのご紹介で日本山岳会山形支部に2014年4月入会して、経験豊富な会員の皆様のご指導により、登山の魅力を教えていただきました。

ただ山スキーだけは、まだハードルが高く感じられ、その気になりませんでした。

今年の3月行事の天元台スキーでの人形石から見るパノラマを見た時“ここを滑ったら気持ちいいだろうなー”と感じたこと、そしてゲレンデでの“初めてのパウダースノーの気持ちのいいスキー体験”をして、山スキーを始めてみようという気持ちになりました。次の行事の月山スキーには、何とか参加したい気持ちが自然に湧き、山スキーを始めるキッカケになりました。

スキーを購入するに当たって、粕谷さん、野堀さん、河口さんからいろいろアドバイスをいただき、また《山のまこちゃん》等のYouTubeをみて学習し、予算や在庫状況から、カスカワにて“エランのスキー、K2の靴、フリッチのビンディング、ポモカのシールの4点セット”を購入しました。(1つだけ残念なのは、河口さんと同じ軽量のスカルパの靴が欲しかったのですが・・・品切れ)

そして早速、4月19日にお試しスキーに月山に行きましたが、雪が硬く思う様に滑れず何度も転びヘルメットの重要性を知りました。またビンディング操作やシール歩行等が身につかないまま、“木に衝突したらどうしよう、川に落ちたらどうしよう”などの大きな不安を抱えながらのお試しスキーでした。

この機会に基本に戻り“昔の平行なスキーの捻っての操作”から脱却すべく、“カービングスキーとは何ぞや”の回答をYouTubeで探し、《スキーを、コントロールするのではなく、スキーにコントロールしてもらおう》のが、“カービングスキーのコツ”と解りました。

4月22日の本番でこのことを意識して滑ったところ、1回は転んだものの、意外とうまく行きました。金姥から藪をやっとの思いでのり越えて、滑り始めたところ、いつのまにか恐怖と不安がよぎっていた気持ちが一変して、“これは面白い”という気持ちに変わっていました。この瞬間が、当日の私の一番の収穫でした。そして終わってみて、また月山に行きたい気持ちにさせてくれました。

今回皆さんから教わった教訓をもとに、次回の山スキーをもっともっと楽しみたいと思います。今後ともご指導、宜しくお願いします。



蔵王害虫被害調査登山

会員番号 15137 野堀嘉裕

山形支部が蔵王山系のアオモリトドマツ（オオシラビソ）の害虫被害調査を始めたのは2018年3月のドローンによる写真撮影が最初である。調査結果は日本山岳会報“山”877号に掲載された。その後、悪天候やコロナ禍などで計画されていた調査が中断したが2022年5月に実態確認のための山行を行い、地蔵山一帯の被害地の観察が行われその報告が支部報“やま”19号に掲載された。2023年は5月20日に現地調査を行った。当日は蔵王温泉スキー場の全域でロープウェイが点検中で運行停止のため参加者全員が自家用車でパラダイスグレンデ下まで移動した。

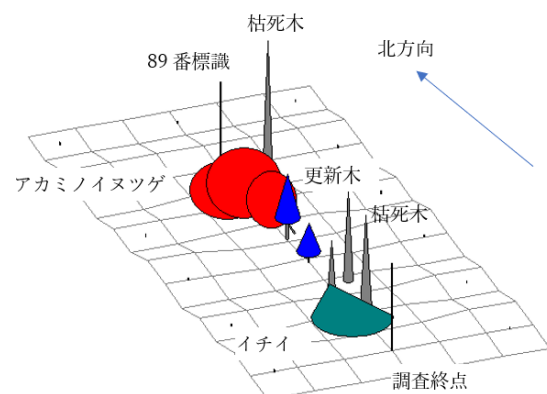
行程は、パラダイスグレンデ下～ザング坂中腹まで登山～樹氷原コース標識80番で現地調査～昼食～樹氷原コース標識89番で現地調査～パラダイスグレンデ下まで下山、その後解散しそれぞれ自家用車で移動となった。

調査の概要は以下のとおりである。樹氷原コース標識80番及び89番を起点として林道側から森林内に直角に10mの調査ラインを設定し基点と終点のGPS座標を計測した。その後、調査ラインの両側2m範囲の樹木の位置、樹種、胸高直径、樹高、枝下高、樹冠幅、健全度等を計測した。調査地一帯は樹木の他に高さ2～3mのチシマザサが猛烈に繁茂しており、参加者は藪を漕ぎ、斜めになりながら移動するという過酷な調査を行った。当日は調査に支障があるほどの悪天候ではなかったが、風が強かったのでドローン撮影は中止し、後日ドローンによる写真撮影を行い、鳥瞰画像やオルソフォト（正射投影画像）を作成した。

調査結果の立木モデル化図をみると、枯死木の他に更新木や広葉樹が成立していることがわかる。今回の調査で立木の位置やサイズが特定された。今後は再調査を繰り返すことで対象木の推移が把握できることになる。今後の調査で把握できることとしては枯死木がどのくらいの時間で倒伏するのかという点と、更新木が樹氷を構成するまでに何年かかるのかという点である。これらを明らかにするためには毎年の調査は必要なく、2年毎の継続調査で十分と考えられた。



ドローンによる鳥瞰画像



Forest Window による立木のモデル化図

宮城支部との交流会

会員番号 17125 丹野浩之

6月17日（土曜日）～18日（日曜日）の2日間にわたり、山形支部と宮城支部の交流会が開催され、山岳会のイベントに初めて参加させて頂きました。

17日13:00に蔵王町遠刈田地区公民館ホールにて受付を済ませ、同ホールにて13:30より山岳気象専門の株式会社ヤマテン代表取締役 猪熊 隆之氏による山の天気ライブ授業の机上授業が始まりました。気象について基本の「き」から始まって進んでいきます。詳しい内容はすでに忘却の彼方へと消えていっておりますが、テキストに従って雲の出来方、形よっての風や大気の状態などを判断するといった感じで進んでいったと思います。途中、眠くなることもなく（本当です）3時間の講義が終わりました。

続いては、宿泊場所のActive Resorts 宮城蔵王にて交流会です。部屋に分かれた後、練習用の○ールを開けてたら「みんなで練習してるからきませんか」とのお誘い。はいっ！と即答。いそいそと自分のビー○を持ってお邪魔いたしました。全ての方がはじめましてではありましたが、優しく迎えて頂き色々とお話を伺えたのがとても嬉しかったのを覚えております。

18:00からは懇親会。もちろん宮城支部の方と一緒に。ビール瓶を持ちながら皆さんのところを回ってご挨拶させて頂きながら宴も進んでいきます。猪熊さんも参加していましたので、昼の講義の中で理解できなかった大気の大循環とコリオリの力について調子に乗って質問してしまいました……。さすがに酒の入った所では解説が難しいようで、猪熊さんに申し訳ないことをしたなとちょこっと反省した次第です（すぐに忘れたことは内緒です）。



翌18日は各自で刈田岳レストハウスに移動し、現地での授業です。風がまあまあ強く、前日勉強した【高層雲が次第に厚くなって出来た笠雲】が綺麗に出来ていておもわぬ所での復習になり楽しかったです。天気もまずまずでイワカガミや駒草平ではコマクサが咲きイワヒバリも飛んで楽しい屋外授業になりました。今回、山形支部の皆様はじめ、宮城支部の方にも大変お世話になり、また、暖かく迎えていただきましたことに感謝申し上げます。今後とも優しくご指導賜りますようお願い申し上げます。



第 36 回 東北・北海道地区集会

会員番号 15785 佐藤一広

2023年7月1日2日、八戸市において、青森支部主催で開催されました。青森支部30周年記念式典も兼ねて開催されました。

山形支部からは、次の10名が参加しました。

粕谷 俊矩、鈴木 理夫、
小野寺喜一郎、武田 幹男、
池田 正道、沼部 貞治、
沼部 ひろみ、田邊 信行、
菅野さゆり、佐藤一広



7月1日 八戸プラザホテル。

JAC東北・北海道地区集会はコロナ禍の影響で、4年ぶりの開催。山形支部からは10名の参加。同時に東北5県と北海道の支部長会議が開催され、2024年、25年の開催地の調整を行い、24年は福島支部、25年は北海道支部ということで承認されました。

青森支部30周年記念式典 約140名参加
記念式典 15:00～15:30 「青森支部創立30周年記念式典」
記念講演 15:30～16:50 「八戸の風土と歴史」

～縄文・古代(戸(へ)の話)・根城南部氏・八戸藩・種差～
講師：元八戸市まちづくり文化観光部長／元八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館館長
古舘光治氏

縄文から近代までのよもやま話。八戸の歴史、津軽人気質など地元でしか聞けない話や、合掌土偶(是川縄文館収蔵の国宝)はじめ、東北、北海道を中心とした縄文文化についての話は興味深いものでした。

その後の懇親会は、各県自慢の地酒を堪能、各支部ステージ合唱、大いに盛り上がりました。

7月2日

【A 山行】 階上岳(はしかみだけ) (740m 一等三角点本点) 別名「臥牛山」と呼ばれ、なだらかな山で八戸市街を一望。

【B ハイキング】 蕪島・種差海岸散策「花の渚」海拔0mから高山植物が楽しめる。

翌日は日本一の朝市(館鼻岸壁)で各自、散策と朝食。その後、山形支部は全員、階上岳登山。往復約4時間の行程。山頂で 昼食、全員集合し記念写真。山頂からの眺めは素晴らしい。陸中から下北までの海岸線や、八戸市街、岩手の山並みの眺望は壮大。美しい自然を満喫。ボランティアとして地元八戸工大高校山岳部員が同行。青森支部の皆さんには、大変お世話になりました。

古道調査・道智道

会員番号 16462 日向稔也

日本山岳会創立 120 周年の記念事業として、山岳古道調査が立ち上げられました。全国から 120 の古道を選抜し、現代でも歩けるよう情報整理を行おうというプロジェクトです。動き始めて 3 年目になります。三方を山に囲まれている山形県には、鳥海山、湯殿山、月山、蔵王山、飯豊山等々古来信仰の山が多数あり、多くの往来が山を越えて行われてきました。山形支部が担当するのは六十里越街道、蔵王古道が主であとは他の支部との連携になります。今年度は六十里越街道の一部という位置づけで道智道の調査を行いました。

道智道は、室町時代中期、大井沢の大日寺（現、大井沢湯殿山神社）の道智上人によって切り開かれた登拝道で、北関東や福島と湯殿山とを結ぶ、当時としては最短のルートで、多くの参拝者がこの道を通って湯殿山に向かいました。現在は、地元、白鷹町の皆さんの尽力により白鷹町の黒鴨から朝日町の木川までの区間が整備されています。

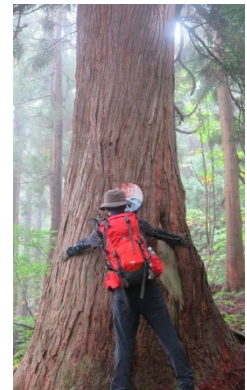
結果的に 2 回（事前の調査も含めれば 3 回）黒鴨に入りました。1 回目は 7 月 8 日（土）。参加者は、木村喜代志、野堀嘉裕、鈴木理夫、佐藤明、日向の 5 名。しかし激しい降雨のため中止。代わりに調査に協力していただいている地元の丸川二男さんのお誘いで、急遽話を伺う会を設定してもらい、道智道を蘇らせたときの話などを伺うことができました。一度失われた道を復活させるのにどれほどの時間、労力、気力が必要なのか。その一端に触れることができました。



2 回目は、9 月 16 日（土）。参加者は 粕谷俊矩、工藤正年、佐藤明、日向の 4 名。黒鴨から茎の峰峠を経て、朝日川上流の木川第 2 発電所までを調査し、データ収集することができました。コース中ほどの茎の峰までは林道で、その先は細い山道です。目立つところ、カーブするところなどに杉の巨木があり、道智道の目印となっています。およそ 20 本確認できました。

この活動報告にはどうしても反省しなければならないことがありました。

ひとつは、第 1 回目の中止解散の後、佐藤明さんと日向が野堀車に同乗し、行動終点に予め停めておいた車を取りに向かった時のことです。木川ダムの下流域に差し掛かったさい、大雨で木川ダムの放水が行われ、進行方向左側の朝日川が凄まじい濁流となっていました。さらに右側の岩からは沢水が道路に激しく流れ込むという状況です。最悪、沢水で車が押し出され朝日川に転落するかも。恐怖でした。幸いにも無事駐車地点にたどり着くことができ、帰路は北進し大井沢に抜けて事なきを得ました。このような事態に立ち至ったのは、日向が何とか調査行動ができないものかと、前のめり気味になり、中止の判断が遅れたことがこの事態につながったのではないかと考えています。中止の判断をする機会は何度かあったと思います。気象情報をしっかりと把握し、余裕のある判断が必要だったと思っています。



もうひとつは、2 回目の調査の時、朝日川の吊り橋跡地点でトラバースルートの入り口が見つからず、周辺を何度も探し回りました。入り口に赤テープを付けていたはずなのに、心中穏やかではありません。最悪、ビバークも覚悟しました。幸いなことに、藪に覆われていた赤テープを佐藤明さんが発見してくれ、先に進むことができました。予定より大幅に過遅れながらも、無事終点の木川第二発電所に到着することができました。赤テープに頼りきりで、1 回来て、目印を付けたぐらいで、人を案内するとは思わなかった態度だったと思います。もっと丁寧な下見や地図の読み込みなど準備の大切さを痛感しました。

それぞれの上高地 霞沢岳・徳本峠小屋

会員番号 10786 山形支部会友 田邊信行

上高地の宿に8月29日夕方着。8月30日朝、上高地～明神館～白沢出合へ。出合から順調に歩を進めたが、足が遅いためゆっくりと緩傾斜の林道を進む。本日の目的地“徳本峠小屋”泊をしたいと考え、勇躍3年越しの上高地行きが叶ったもので、嬉々として歩き出している私であり、霞沢岳は付け足しである。

徳本峠についての文献を拾ってみた。

「日本の登山の黎明時代上高地へ入った人達は、必ず徳本峠の上で、穂高の美しさに心を締め付けられた。徳本峠の穂高は、山の最も美しい眺めとして、どんなに長く言い伝えられて来たか知れない。」(『名作で楽しむ上高地』大森久雄著)

「私達は、焼岳、霞沢、徳本峠、穂高の四点を結ぶ四角の天地で思う存分に暮らしたのである。」(松方三郎元会長)

「私は上高地へ行くのに、ほとんど徳本峠を超えて行ったものだ。峠の頂に立つと、出し抜けるに前穂の偉容が眼前に展開される。それが好きで、バスにも乗らず、徳本峠の道を選んだ。」(北杜夫)

「薄日に蒸された峠の空気は、不気味な静寂さはらんでいた。徳本峠から見た穂高岳。世にも美しいものとあっとたまげて“山好き”となった。」(芥川龍之介)

「帰途の徳本峠で、十数匹の猿の“キャアキャア”枝から枝へたちまちに隠れた一群。ウェストンは嘉門次を案内に徳本峠下の牛番小屋を出発。」(山崎安治)

これらの記述が目にとまった。

古の登山者等が徳本峠を愛で、展望を楽しみ、往来していたことを文献で承知していたので、徳本峠小屋に泊り、それらを感じたかった。

林道から登山道に至る辺りからはつづら折れの道となり、思うように歩けぬ足で、緩やかに登り続け、峠小屋と霞沢岳への分岐へ漸く辿り着き、右へ進むとこれもつづら折れの急登。ようやくジャンクシオンピークに至り、大休止。昨晚の天気祭りを頑張りすぎたのか、思うにまかせない。続々と下山してくる人々と会う。霞沢岳へ向けて小湿地まで来たなら、14～15匹の猿が水生昆虫などを漁り、私の進行を妨げてくれる。強行突破を考えたが、わが越後の猿たちと違い歯向かってこないかと怖くなり、じっとしていることにした。午後の一人旅でもあり、前後には誰もいないなか暫く待機したが、なかなか動いてくれない。霞沢岳までの往復時間を考えたらもう時間切れ。霞沢岳はガスに覆われ、見えなくなっていた。諦めて徳本峠小屋へ向かうこととして引き返し、午後3時過ぎに小屋に至る。

宿泊手続きを済ませ、利用案内で乾燥室、寝床、食堂を案内していただく。5時から夕食、それまでビールと酒で大雪溪を楽しみつつ小屋内を見学。小屋入口部分とその上の寝室は旧来のままで、希望すれば泊まれるとのこと。私は新館に宿泊。旧館は屋外の前と横に倒壊防止の支え棒が沢山添えられていた。うまい夕食を同宿者達と楽しくいただき、小屋談議や登山談議に花を咲かせて、前段の著述内容を反芻しつつ、この小屋に来ることができて良かったと思いながら早々に眠りについた。

翌朝、足が遅いことでもあり弁当給食も携えて、4時出発。白沢出合～明神館前で朝食弁当をいただく。明神館出発6時。山研7時着～入浴等～8時半上高地出発～新発田帰宅13時半。

我が家までお送り下さった沼部ご夫妻と木村喜代志顧問から我が家で休憩願ひ、お別れしました。楽しくゆったりした山研、霞沢岳、徳本峠小屋の3日間の「それぞれの上高地」行事でした。幹事諸氏及び同行各氏に感謝です。



それぞれの上高地 徳本峠山行報告

会員番号 8494 山形支部会友 安井康夫

期 日：2023年8月30日

参加者：L：安井康夫、武田幹男、瀬川 昭、鹿野 実、黒木健一

行 動：山研 07：42～08：40 明神館 08：49～11：37 徳本峠 12：15～14：30 明神館
14：51～15：05 明神池・穂高神社奥宮 15：22～16：20 岳沢湿原 16：25～16：37 山
研

記録・感想：

- ・河童橋から明神館まで緩やかな登山道を進む。途中、小梨平キャンプ場における近年の熊出没やテント泊のための食材コンテナ設置などを説明。
- ・明神館で大休憩後、いよいよ徳本峠に向けて出発。
- ・明神館は、穂高神社奥宮参道の入口に建つ。明神館の現在の地名は上高地・明神であるが、明治から昭和初期までは上高地・徳郷といったそう。明神館としては昭和8年から営業しており、その以前には徳郷小屋が建っていたとのこと。
- ・峠入口からひろい登山道を進む。白沢出合を過ぎ黒沢沿いに進んでいくと広い登山道は次第に狭くなっていく。
- ・登山道の勾配がきつくなっていくと歩行ペースが落ち始め、およそ20分ごとに休憩、さらに水場で大休止（水場で若い外人登山者に出会う）。
- ・大きな道標が現われるも、徳本峠まで0.8kmの表示に力が落ち、さらに峠まで0.2kmの標識からも遠い。
- ・11：37 徳本峠にやっと到着。峠からは西穂高岳などが望め、堪能する。
- ・現在の徳本峠小屋は大正12年から営業し、外側の建造物は登録有形文化財に指定されている。オーナーの高橋幸夫さんが留守だったので息子さんにあいさつ。お父さんの幸夫さんは8/31 荷揚げ作業のため上高地のへり場へ下山。
- ・徳本峠の「本」は当て字とのこと、本来は徳郷峠と言われていたそうです。大正2年に50000/1地図ができる以前は、峠のみで名前はなかったそう。現在の徳本峠小屋は大正12年から営業し、外側の建造物は登録有形文化財に指定されている。明治26年（1893）の夏、日本アルプスを紹介したウェストンが上條嘉門次を引き連れて島々から島々谷を遡ってこの徳郷峠（徳本峠）を越えている。残念ながら、現在は崩落のため島々谷は通行禁止となっているが、来年の開通にむけて工事が進んでおり来年の徳本峠越えが楽しみだ。
- ・12：15 徳本峠を出発。下りは早く、といいながらも慎重に足を運び、14：30 明神館に到着。早速、ビールやソフトクリームを口に入れる。
- ・せっかくなので明神池と穂高神社奥宮を訪れる。穂高神社は天皇家のおじさんにあたり、菊のご紋の入った鳥居は立派。もともと北九州の海神族が祖神で現在の安曇に住むまでの間、愛知県の渥美半島にも住み、「あつみ」が「あずみ」に変化して安曇族と言われるゆえん。明神池で毎年10月8日に「お船祭り」が執り行われるが、船を浮かべるのも祖神が海神だからだ。
- ・帰りは梓川の右岸を通り、木道、森林、湿原などを探勝、岳沢湿原まで来ると山研は近い。
- ・全員、怪我もなく無事16：37 山研に到着。一杯のビールが美味しい。



徳本峠小屋 手前の古い建物は登録有形文化財



徳本峠にて

それぞれの上高地
上高地から奥上高地・槍見台散策

会員番号 7734 木村喜代志

コロナ禍を挟んで「三度目の正直」の言葉通り、上高地が微笑んでくれました。「それぞれの上高地」の通り参加者の希望が、徳本峠・霞沢岳、西穂高山荘、焼岳、徳本峠、上高地散策と出てきました。焼岳の火山活動情報や諸々の事情から徳本峠・霞沢岳（1名）、徳本峠往復（5名）、槍見台までの奥上高地散策（5名）に絞られ、行動に移すことができました。

8/30 2023（快晴）

上高地は岐阜県、富山県と長野県に跨る飛騨山脈、通称北アルプスの南部、穂高連峰の長野県側で梓川上流域にある。壮観な山、静寂な池、清流の川に恵まれ国の文化財の指定を受けている。今回もまたお世話になったのは日本山岳会山岳研究所、通称「山研」で、河童橋の直ぐ上流でカラマツなど原生林の中に建っている。登山指導や自然保護活動をはじめとする研究や講習会、会員の宿泊を目的としている施設である。

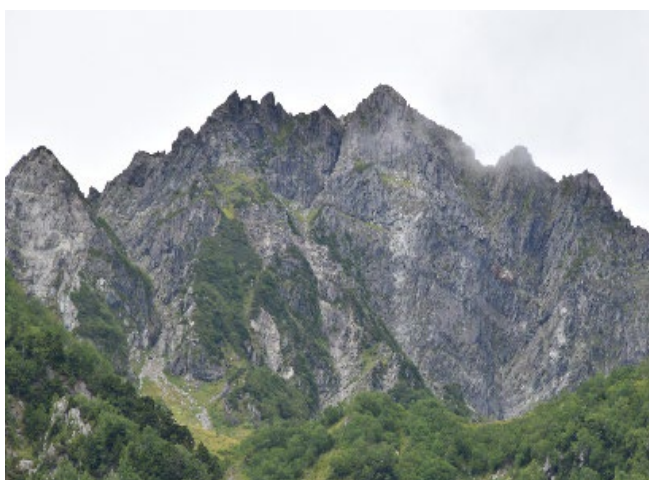


朝食準備前の5:00、徳本峠・霞沢岳組出発。徳本峠組は7:30、30分遅れで槍見台散策組が山研を後にした。コースは山研（1,500m）3km⇒明神（1,530m）3.7km⇒徳澤（1,560m）3.5km⇒横尾（1,615m）標高差195m⇒槍見台（1,810m）往復である。

歩き出しは穂高連峰や明神岳の山々は見えないが、原生林の森林浴で始まった。途中に散在する岳沢湿原などではカモ類が餌を啄んでいた。明神池や穂高神社奥社は帰りの楽しみにして明神橋を渡って梓川左岸に移った。河童橋付近では重なり合っていた明神岳（2,931m）が、横に広がりそれぞれの岩峰が競い合うように聳えていた。穂高の前衛峰的な存在だが空に向かう尖峰群は、裾を流れる梓川とは対照的な眺めである。60年ほど前、蝶ヶ岳で北アルプスの眺望を楽しんだ後、真っ先に登って友を偲びぼろぼろと涙を流した山である。



明神橋と明神岳



前穂高岳東壁

徳澤に向かって歩き出すとやや右手前方の尾根越しに端正な三角形の常念岳（2,857m）が見え、左側には前穂高岳の全容が次第に現れてきた。南に伸びる尾根は先ほどの明神岳に、そして北に走る尾根は北尾根となって屏風岩まで伸びている。又白谷に面する東壁は、井上靖氏の小説「氷壁」の舞台となった岩場である。50年ほど前、大学山岳部で山に明け暮れていた教え子2人と3人で、天空のキャンプサイト奥又白池と濁沢をベースにして穂高の岩場で遊んだことがあった。今、思い出しても楽しい岩登りの日々であった。

徳澤近くで梓川の河原に出てくると上流に大天井岳（2,922m）が見えてきた。一緒に前穂東壁の岩場で遊んだH.Kが眠る山である。ぎっしりと思い出の詰まった山々が一度に現れると、頭の中で時間の整理がつかず混乱してしまった。

明神から横尾まで間に大きなザックを背負った多くの若者たちと行き交った。集団と擦れ違う時に漂う汗の臭いは、彼らの長い山行を物語っていた。長身の外国人が足早に追い越して行く。「山に登る」という明確な目的を持つ人々特有の表情と行動が感じ取れるひと時でもあった。徳澤と横尾のキャンプサイトでは、1人用の小型テントが圧倒的に多かった。今の時代の登山形態を表わしているのだろうか。横尾山荘前で一息入れていると、前穂北尾根末端の岩壁、屏風岩がそそり立っていた。横尾大橋をバックに集合写真を撮った。ここは槍ヶ岳から流れて来る槍沢と横尾本谷が合流し梓川となる地点である。



加藤女史提供



槍見台からの槍ヶ岳

蝶ヶ岳のコースに入り、槍見台を目指して登り始めた。僅か200mの登りだが急坂で、老体にはこたえた。槍の颯爽とした鋭い山容を目にしてほっとした時、槍見台の道標が目に入った。時折、雲が流れる槍ヶ岳（3,180m）の姿は、天に槍を衝く形そのものであった。左手には大きく山腹がえぐり取られた北穂高のカールが望まれた。

後は、往路をたどるだけである。「それぞれの上高地」を噛みしめながらゆっくりと昼食をとった。帰れば夕餉の準備が待っている。楽しい夕食への序奏と思えば、これもまた楽しみである。



槍見台からの屏風岩（左端）、北穂高のカール、槍ヶ岳（右端）

熱中症警戒アラート発令の巷とは別世界の^{ねぐら}上高地で、2泊3日快適で愉快的ひと時を過ごすことができました。これも偏に山研管理人で支部会友の山田和人さん、食料計画、買出し、運搬を引き受けていただいた支部会友

の安井康夫さん、企画してくれた支部執行部、緻密な心遣いで計画実現に導いてくれた武田幹男会員、そして参加者のお力添えがあつてのことで感謝申し上げます。

<メンバー> 加藤 美智、板垣 悦子、沼部 貞治、沼部 ひろみ、木村 喜代志 5名

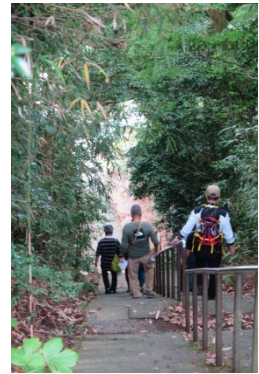
清掃登山・芋煮会

会員番号 16462 日向稔也

今年の清掃登山・芋煮会は9月30(土)～10月1日(日)、遊佐町の西浜キャンプ場のケビン3棟を借りて行うことにした。清掃するのは鳥海山の太平口から笠ヶ岳へのルート。参加者は、粕谷俊矩、鈴木理夫、小野寺喜一郎、野堀嘉裕、志田郁夫、池田正道、沼部貞治、沼部ひろみ、後藤彰、瀬川昭、加藤美智、日向の会員。それに、小林正志、安井康夫、酒井眞澄、高橋毅の会友の方々、計16名。多くの人に集まってもらった。一日目は、地元吹浦の大物忌神社周辺の散策、二日目が清掃登山の予定である。

<吹浦の大物忌神社周辺の散策>

この神社は正式には鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮と呼ばれ、鳥海山山頂にある大物忌神社本宮に至る登拝道の吹浦側の起点となっている。長く急な石段を登ると、拝殿があり、さらに奥に本殿がある。本殿の右奥に道が続いており、これが登拝道なのだろうと思われる。この道を5分くらい進むと、国道7号線に出た。この国道はもとは海岸を通過していたが、現在は新しく山側を北上するルートになり、登拝道は寸断された形になっている。国道の向こう側に登拝道の入り口らしき階段が見えたので、そこに入ってみたが、すぐに深い藪となり、先に進むのは無理であった。ここも鳥海古道の調査区間になっており、もう一度確認してみたい場所である。



<懇親会>

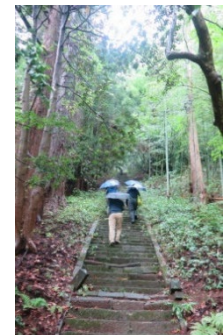
ひとつのケビンに皆さんが集まり芋煮会。食べられた庄内風芋煮に高橋毅さんのホタテの差し入れが加わり、大変なごちそうだ。酒が進むにつれおしゃべりも賑やかになる。

<生憎の雨>

二日目は生憎の雨。計画していた清掃登山。鳥海ブルーライン標高1080メートルの太平口からの行動は残念ながら無理との判断である。代わりに、希望者でこの地域を散策することに。選んだのは、丸池様、牛渡川の鮭孵化場、それに蕨岡の大物忌神社。

鳥海山山麓一帯は豊富な湧水に恵まれ、各地に泉や清流が点在している。「丸池様」は、青みがかった沼で、透明度が高く、神秘的な雰囲気を漂わせている。パワースポットとしてインターネットでも紹介されるなど、訪れる人も増えている。近くを流れる牛渡川には鮭が遡上してくるが、残念ながらまだ始まっていなかった。

次に、南下して同じ遊佐町の蕨岡に向かった。日光川と月光川にはさまれた上蕨岡地区。天狗森(標高240m)の丘陵の南麓に鳥海山大物忌神社蕨岡口ノ宮がある。山門をくぐるとすぐに左手に本殿がある。もとは東の山手にあったものを、戦後に移築されたものである。ここは昨日訪れた吹浦の大物忌神社と並ぶ、鳥海山への登拝道のもう一つの起点となっている。本殿は荘厳で往時の繁栄ぶりを示している。ここから、北東に向かい、横道、滝の小屋を経て河原宿、鳥海山山頂へとつながる。長丁場である。ここも古道調査の対象になっている。



残念ながら清掃登山はできなかったが、大物忌信仰の2つの登拝道の起点を確認できたことは私にとっては収穫であった。鳥海古道の調査は本部が担当してくれるが、2024年の夏に現地調査が計画されている。私も同行させてもらおう予定である。

支部晩餐会

会員番号 16462 日向稔也

今年度の支部晩餐会は庄内地区で行いました。

計画の概要は

11月3日(金) 小名部公民館集合 「日本国」登山。中の俣コース往復
「あつみ温泉・瀧の屋」にて支部年次晩餐会

11月4日(土) 摩耶山登山 関川登山口往復

<日本国登山> 参加者は、木村喜代志、粕谷俊矩、鈴木理夫、佐藤映子、野堀嘉裕、武田幹男、工藤正年、日向稔也、沼部定治、加藤美智、板垣悦子、田辺信之、丹野浩之、神戸佳子さんの14名。山形100名山にも入っている標高555mの低山です。「日本国」



という名前の由来は、大和朝廷の支配地域の最北端としてここまでを日本国としたという説など諸説ありますが、その名前や標高から近年人気の高い山で、標高にあやかって今年(令和5年)の5月5日に登山イベントが開催され、話題にもなりました。なだらかで上りやすい山ですが、急な箇所もあり、ゆっくりとおしゃべりを楽しみながら登りました。

<晩餐会> 日本国登山のメンバーに加えて、後藤彰、小野寺喜一郎、池田正道、加藤美智、高橋毅さんも加わり、晩餐会。最初、木村喜代志さんから「摩耶山有情」(同名のエッセーも頂戴しました)と題してして講話をいただきました。長年の摩耶山登山の経験や広い知見をもとに、思い出を語ってもらいました。文章の最後に次のようにあります。「摩耶山は登る人の求めるものを忠実に、しかも直ぐに跳ね返してくれる貴重な山である。それだけに奥行きが深く、飽きのこない山である。決して意気込んで立ち向かう山ではないし、かといってただ眺めるだけの山でもない。・・・自然に脚の向く山で、心に息づく山である。」

さらに、新会員に自己紹介をしてもらったり、互いの近況を確認しあったりしながら、恒例のオークション。今回は、後藤彰さんの蔵書だけでしたが、山の本だけでなく、様々な分野の本もあり、蔵書量、読書量の多さに今回も圧倒される思いでした。

<摩耶山登山>

翌4日(土)の摩耶山は天気が下り気味で、雨の危険があったため、残念ながら中止になりました。次の機会に譲ることにして、解散です。会員の皆さん、是非いらしてください。



2024 1/23-25 『蔵王樹氷原を滑る会』

会員番号 16797 沼部 貞治

今年は暖冬で蔵王は雪が少なく「スキージャンプワールドカップ女子大会」開催もエコーラインから雪を運んでの実施となり、支部行事の日程は大会と重なり次の週に変更となりました。

1日目 午前11時 粕谷さん・武田さん・会友の安井さん・酒井さんと中央ゲレンデで待ち合わせをし、パラダイス～黒姫へ。連日からの融雪と冷え込みでハードバーンを注意しながら滑る。昼食後ユートピア～連絡コース～パラダイスへ向かう。途中、会友の小林さんと遭遇（黄色のウェアが目立つ）皆さんと一緒にハードバーンを楽しんで宿へ戻った。

今回の宿は「ル・ベール蔵王」 その昔、画家の岡本太郎氏の定宿だったので、館内には岡本氏の絵画や力強い書が飾られていた。

入浴後は部屋で皆さん集まり、軽く食前酒を飲みながら近況報告。その後、館内レストランで楽しい懇親会が始まる。（会員7名・会友4名）



2日目 新雪 20cm 積り、昨日のハードバーンは解消され膝に優しい。

ただ、ガスが収まらず視界が悪い中、中央～ダイヤモンドバレーを滑る。

高鳥コース～上の台へ向かいジュピアでコーヒータイム。その後スカイケーブルで中央ゲレンデを滑る。吹雪が止まず大平コース～サンライズを滑り中央ロープウェイ横のレストランで昼食（蕎麦やピザ、皆さんいろいろ食べる）

ここで一泊で帰る粕谷さん・武田さんと別れた。

午後の部は中央ロープウェイで中央ゲレンデ～パラダイス～樹氷原を滑る。

インバウンドでアジアからのお客さんも多く寒い中地蔵様を見に混んでいた。樹氷原のバーンは少ない雪ながら繋がっていてユートピア～黒姫を予定したが足を攀った方がいて急遽変更し、連絡コース～パラダイス～大平～サンライズと滑り降り宿に戻った。ここで、河口事務局長と会友の安井さん・酒井さんが自主トレと称して滑り延長！入浴後、美味しい食事と楽しい歓談。

窓の外を見ると待望の雪が降ってきた。このまま雪は降り止まず朝まで50センチの積雪を記録する。米沢の積雪が65センチと連絡があり、帰途の道路状態が心配となり帰る決断をした。安井さんと酒井さんは最初から3日券を購入、強化選手のように滑り切ったようです。



『学校から見える山』

会員番号 11637 鈴木理夫

【活動の概要】

今年度の「学校から見える山」プロジェクトの最大の課題は、資金不足の中でどのような活動を行うかという点であった。新規のスポンサーは見つからず、今更ながらマエタテクノロジーリサーチファンドによるご支援の有難さを痛感することになった。本部から特別事業助成金の10万円をいただき、とりあえず吾妻～蔵王の展望図の原画作成を行い、現在校正段階まで作業は進行している。資金的な目途は立ちつつあり、来年度に寄贈活動を実施できる見通しである。

一方、大岡山からの月山・朝日・葉山の展望図について残部32部を山のみもとに立地する山形市立楯山小学校へ、地元の明日さんと共に再度寄贈し、子供たちの前で地元の山に関する話をする事ができた。

【活動報告】

- ① 2023年10月30日(月) 午前9～12時 寒河江市ハートフルセンター 301会議室
参加者 野堀嘉裕(カシミール・データ持参) 沼部ひろみ・沼部貞治 木村喜代志
粕谷俊矩
<校正作業>
国土地理院2.5万図とカシミールのデータの山名、標高と展望図の記載事項との照合。
訂正箇所や要望を佐藤 要さん(監修者)、木山由紀子(作画者)さんに連絡
- ② 12月5日(火) 午後4時半～50分 北星印刷
岩間奏子社長・佐藤要さん・鈴木理夫
デジタルデータ作成に関する打合せ 見積もり依頼 今後の見通し
- ③ 2024年1月23日(火) 午前9時半～10時半 山形市立楯山小学校
贈呈の説明文作成 粕谷俊矩
当日参加者 佐藤勝子校長先生 會田雄一教頭先生 六年生の皆さん
明日正さん(地元在住)・鈴木理夫
打合せと贈呈式(10時～)を実施
- ④ 2月12日(月) 荘内銀行ふるさと創造基金への応募 鈴木理夫
※選考結果は4月下旬～5月上旬

『学校から見える山』 朝日連峰・月山・葉山 について

私たち、楯山小学校6年生は、5年生の時に、『学校から見える山』をいただきました。もらったときに、美しい山、大岡山はどこ、という驚きとわくわく感がありました。

そして、今、6年生でもう一度じっくりとみて、次のような感想や感動、良さの気づき、今以上によりよい物にしていきたい願望が生まれてきました。

それらを以下にまとめましたので、ご覧ください。お願いします。

また、今回、このような機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

地域を考える時間となり、楯山地区のことをもっと好きになりました。ありがとうございました。

1 感想や感動について

(1) 絵をみて

- ・四季折々楽しめる美しい山々である。
- ・山の形や姿が美しく見える。
- ・長く広がる山々、美しい川、緑豊かな山々だとわかる。

(2) 地図の役割として

- ・山の名前、山の位置がみやすくわかりやすい。
- ・江が細かいところまで再現されていて、見やすい。
- ・山の近くにある建物や川などの位置情報がわかる。
- ・山の名前を知ることができる。覚えることができる。
- ・山だけでなく、川の名前も覚えることができる。
- ・山の高さを知ることができる。

(3) 機能性として

- ・コンパクトに収納でき、持ち運びしやすい。
- ・いつでも見ることかできる。
- ・登山した時に見ると楽しい。

(4) 絵としての眺めについて

- ・全体が見ることができるので、ながめがいい。
- ・山を一目で見渡せる。
- ・美しい眺めである。
- ・一望できる。

2 良さについて

1 感想・感動の(1)～(4)について

(1)では

- ・景色を見に、登山してみたい、写真にとりたい。インスタにあげたいと感じると思う。
- ・映える。サイトをつくって、景色を楽しむ人がでてくる。
- ・この地域にいてみたいと思うようになる。
- ・四季折々の景色をみて、美しいと思い、心が豊かになる。
- ・癒やされる。

(2)では

- ・楯山地区に人が集まってくると思う。すると、人口も増え、経済力があがる。
- ・楯山小にも訪問する人がでてくると思う。
- ・県外の小学生がみて、楯山小学校にきたいと思う人がいるかもしれない。
- ・修学旅行などで交流できるようになるかもしれない。
- ・地元の方は、もっと地域が好きになる。
- ・登山初心者の人に優しい。
低いこの山から登ってみようかなと登山のハードルが簡単になる。

(3)では

- ・手軽さがある。
- ・登山の荷物は少ない方がいいから、とても便利である。

(4)では

- ・また、いてみたいと思える。
- ・頂上からの景色を想像することができる。

3 ご意見・要望

- ・ケースをデコる。
色、模様等を工夫すると目立って、手に取る人が多くなると思う。
- ・デザインとして、さくらんぼ、山形のキャラ
山の景色、月山など有名な山を入れる。
- ・百名山の宣伝をする。
- ・オリジナルキャラクターをつくる。
- ・ドラえもんのシール付きにする。
- ・表紙の名前を『山と仲良くなろう』など短文で楽しいものにする。
- ・スタンプラリー形式にする。
頂上までいったら、ラーメン一杯のご褒美。
- ・クイズ形式にする。豆知識を入れる。
- ・手すりはここにあるよ、などお年寄りにも優しい工夫を入れる。

特別寄稿

加茂地区風力発電、撤回の取り組み

会員番号 12118 梅本幸巳

加茂地区に風力発電計画

2022年7月、ジャパンリニューアブルエナジ（JRE）は鶴岡市加茂地区の通称加茂山に高さ143mから182mの発電用風車8基を建設するとして周辺地域で説明会を開催しました。出力は1基あたり6100から4200kWの総出力は40,000kWを見込み2027年に着工し、2028年末の運転開始を目指すものです。JREはすでに鶴岡八森山風力発電所三瀬地区が、2021年11月に5機の風車が稼働しており、現在鶴岡市三瀬矢引地区でも計画中です。

景観一変、動植物に影響懸念

JAC山形支部会員の協力を得て「GISによるシミュレーション画像」（資料①）を作成したところ、景観が一変し風車の設置と搬入道路の工事が動植物に影響する可能性もあります。風車の予定地と周辺にはブナ原生林、北限のタブの木、シラネアオイ、カタクリ、雪割草、ギフチョウなどが分布します。さらに環境省指定の絶滅危惧1B類クマタカと準絶滅危惧オオタカが営巣する。冬は絶滅危惧1B類のイヌワシ、絶滅危惧Ⅱ類のオオワシとオジロワシが餌を求めて飛来するため、これらの鳥類が風車に衝突する可能性もあります。

鶴岡市長に対する要望書提出

「出羽三山の自然を守る会」は加茂の発電用大型風車の設置計画を中止するよう鶴岡市皆川市長に提出しました。理由は①ラムサール条約登録湿地の大山上池・下池に隣接し、野鳥が風車に衝突する可能性が高い。②加茂地区は、日本遺産北前船寄港地。船主集落の認定地③高館山からの荒倉山に至る。尾根スジには貴重な山野草が持生する。庄内海岸アルプス歩道があり、市民の山歩きや景観を阻害する④風車は住宅地から600メートル離すと定めた鶴岡市における風力発電施設の設置等に関わるガイドラインに抵触すると市長に説明した。鶴岡市長に対する要望書の提出が報じられると、いろいろな方からの連携の問い合わせがあり、何度かの打ち合わせ会を行って反対する会を立ち上げることになりました。反対する会は11月2日、呼びかけ人として40名程度の賛同者と記者会見を行い、署名活動を開始しました。多くの呼びかけ人は大山上池・下池に訪れる野鳥の風車との衝突を心配し、日本遺産である加茂の景観が損なわれることに心を痛める方々です。

鶴岡市長はJREに計画の中止を求める

鶴岡市の皆川市長は2023年2月1日に鶴岡市加茂地区で計画されている風力発電事業に

ついて事業者の JRE に対し計画の中止を申し入れたことを記者会見し報告しました。市長の早い決断を歓迎します。事業主体である JRE は前年 12 月 21 日建設予定地に風況調査用の機材をヘリコプターで搬入し、風況調査を行われています。しかも、他の風車建設の事例ではこれまで 2 年前後要する風況調査の結果を受けて事業推進の次のステップに進んでいましたが、本計画では風況調査と並行して環境アセスメント方法書を近々提出する予定とのことでしたから、その意味でもタイムリーだったと思われます。また、特筆すべき自然環境や歴史・文化的な資源を守るということを最重要視した基本的な姿勢です。国際的なラムサール条約登録にされていることから考えれば市長の対応は当然です。

署名 1 万筆を超える

その後多くの方々と連携し、2022 年 11 月 2 日に反対する会を結成しチラシ（資料②）宣伝、反対の署名活動に取り組みました。その結果、2023 年 1 月末のわずか 3 ヶ月で 7000 筆の署名が集まりました。しかし、2 月 1 日の市長記者会見による事業者に対する中止要請があったことから、署名活動を行っていた方々の中には問題は解決したものと思ひ込み、一時署名活動が停滞しました。そのようなこともありましたが 8 月末で 1 万筆を超えました。

クマタカの死骸発見

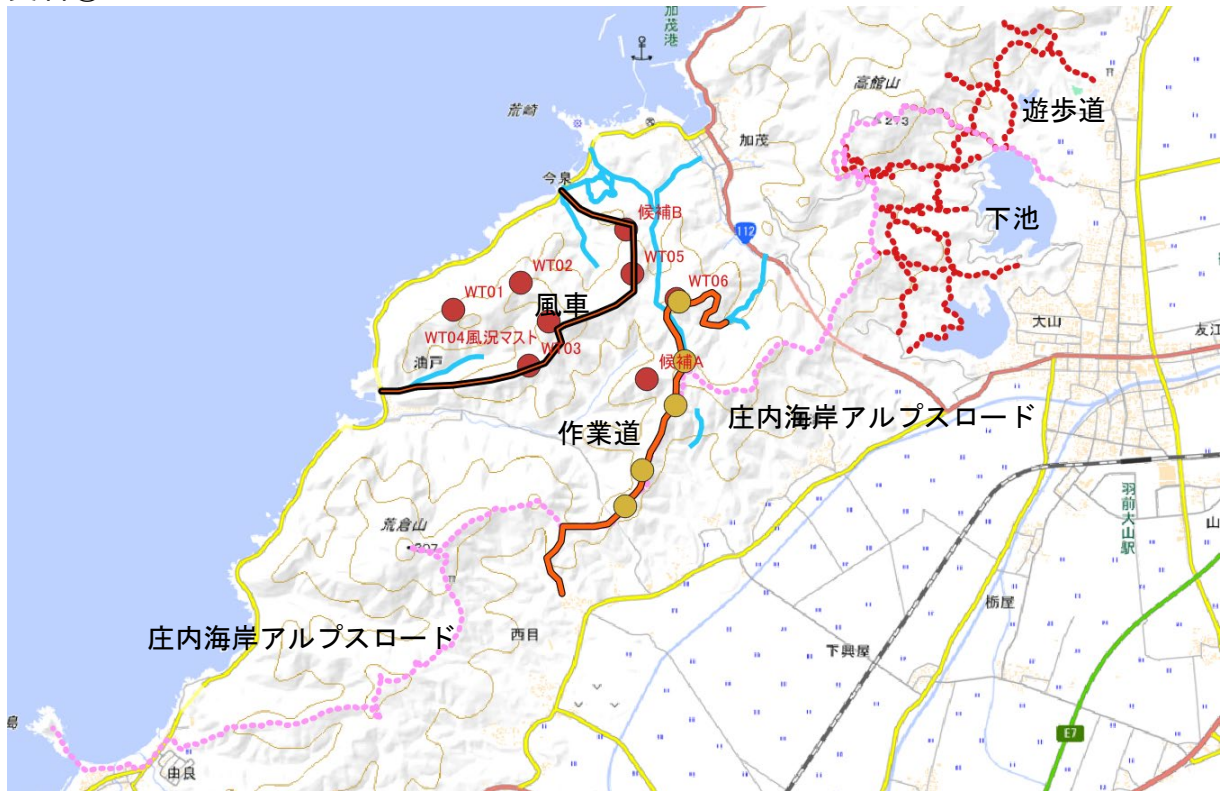
6 月 24 日、2021 年 11 月に風力発電が稼働した八森山での事業者である JRE が環境影響評価法に基づく事後調査でクマタカの死骸を発見しました。これは調査を待つまでもなく、野鳥の風車とのバードストライクであり、加茂の風力発電施設の建設計画に反対する会が危惧していたことが既存の風車で起きました。この事故が起きた八森山はラムサール湿地からおよそ 7 から 8km。現在環境影響評価手続き中の三瀬矢引は 5km、加茂は 1.5km にあり一番遠い八森山での事故です。

このバードストライクを受け、日本野鳥の会、日本野鳥の会山形研支部、日本雁を保護する会の 3 団体が JRE に対し 8 月にラムサール条約湿地である大山上池・下池に生息する希少鳥類の保全に関する要請書を提出し、事業の中止を要請しました。また、反対する会も別個に JRE に対し 1 万筆の署名と一緒に建設中止を求める要望書を提出しました。

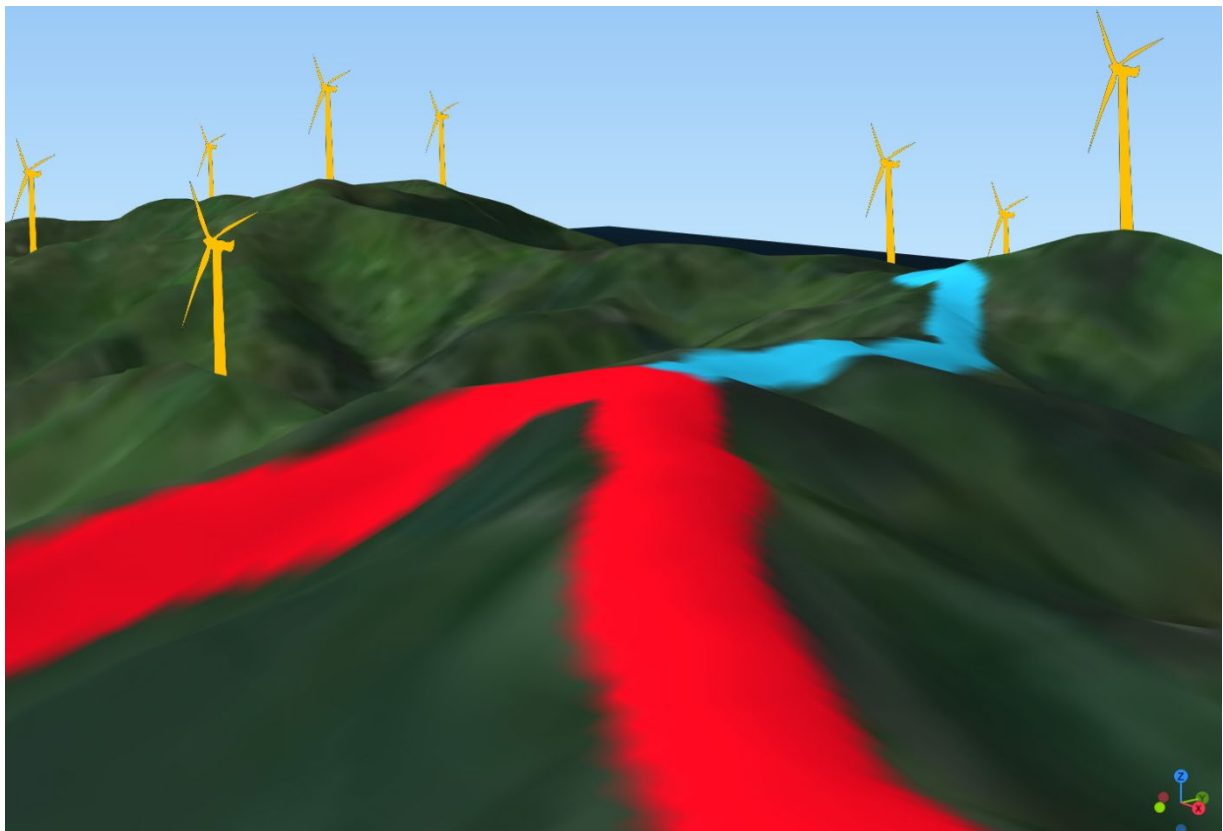
JRE が建設計画を撤回

JRE は 10 月 16 日、鶴岡市に対して自社の鳥類調査で計画予定地の上空を多くの野鳥が飛翔していることが確認でき、風車を建てることでそれら野鳥へ与える影響が大きいことから事業の中止を決めたと伝えました。鶴岡市長に対する反対の要望書提出から、1 年にわたる反対の取り組みが終わりました。多くの方々と反対する会を結成し、署名活動の取り組みを行ってきましたが、多くの団体市民との連携の大切さを感じた戦いでもありました。

資料①



加茂地区に建設予定の風力発電位置



庄内海岸アルプスロードから見た風車の予想図

ラムサール登録湿地の近くに大型風車が建設されると？

鶴岡市加茂地区の尾根筋に高さ 182m(三瀬 139m の 1.3 倍) 8基の大型風車の建設計画が進んでいますが、その建設は非常に大きな問題があります。



ラムサール条約とは？

正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といい、1971年にイランのラムサールという都市の国際会議で採択された条約です。日本国内では、2022年時点で**53か所**の登録湿地があり、「大山上池・下池」は「定期的に2万羽以上の水鳥を支える湿地」という国際的選定基準を満たし、2008年の国際会議で、山形県、東北日本海側で唯一の条約湿地に登録された、国際的に重要な特別保護地区です。

野鳥の現在は？

コハクチョウ 3千羽以上、マガモ 3万羽 天然記念物 オオヒシクイ 1000羽、ヒシクイ 200羽、マガン 200羽、ハクガン、シジウカラガン 希少猛禽類 オジロワシ、オオワシ、イヌワシ が頻繁に飛来。(2021 環境省調査) 建設予定地にはクマタカの営巣地が存在します。

風車の計画は？

JRE (ジャパン・リニューブル・エナジー (株) 本社東京) の計画です。

問題は？

建設予定地は、ラムサール湿地から 2Km。全国で登録湿地5km以内では、ほぼ皆無。

JRE は三瀬 (湿地から 8 km) で2021年11月供用開始。現在湿地から 5Km 先の矢引地区で風車建設も進んでいます。環境アセスで「条約湿地に隣接している事により、野鳥への影響を回避しよう」環境大臣意見、経済産業大臣勸告を受けています。いずれも渡り鳥のルート上にあり、野鳥の衝突(国内 580 件発生)・飛来地の回避など重大な影響が懸念されます。さらに計画地は生物多様性に富んだ貴重な植物が豊富に保たれている地域であり、「庄内海岸アルプスロード」として県内外から山野草ハイキング等で親しまれている場所です。風車の運搬のための道路建設、送電線建設による森林の大規模伐採などで、オオミスミソウなどの山野草や貴重な自然生態系が破壊されます。



電子署名はこちらへ↓



2022.10.30 今泉地区の説明会でJREが示した図を見やすくしました。

景観の影響は？ 加茂は日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に認定されています。日本遺産は「地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリー」を文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で加茂周辺の環境、北前船船主の家屋と蔵、善寶寺等は魅力ある有形・無形の文化財です。2019年に認定された日本遺産の港町にとって風車は景観を損なうものにほかなりません。写真のように威圧感があります。

健康被害があるって本当？ 秋田県内で風車騒音による健康被害の訴えがあります。

風車の低周波音が、入眠妨害や不眠症など、睡眠障害を引き起こす事は、国内の1000人規模の疫学調査で明らかになっています。騒音公害の研究者、北海道大学 田鎖助教は、「6,000kWの風車であれば、最低でも 2.5Km、民家から隔離が必要」と示し、風車の低周波音によって、加茂、油戸、大山など、1,600人の方が入眠時妨害を受け、39人が不眠症になる。ということが試算されました。

鶴岡市長が、JRE に中止を要請！

JREは、未だ、撤退せず。あと一步、力が必要です。

2月1日、皆川治 鶴岡市長が、JREに対して、中止を申し入れしました。

山形県では、ラムサール条約登録湿地近傍であり、望ましくないと公表し、国では、バードストライクや鳥の営巣、採餌場などへの影響を強く懸念している。また、一定の地域に複数の事業が集中する場合には、飛来ルート、採餌場への移動などへの累積的な影響が懸念される。特に、ラムサール条約湿地に登録されるような、重要な生態系では、事前に慎重に判断することが重要だ。

県で唯一登録されているラムサール条約登録湿地の近傍であり、クマタカなどの猛禽類の生息・営巣や、渡り鳥の生息への影響、また、自然環境、景観への影響が懸念されることから、「鶴岡市における風力発電施設の設置等に係るガイドライン」の制限対象区域に掲げる、本市の豊かな自然環境に相当すると判断をした。以上、予防的措置も含め、中止要請を表明する。

2023.2.1 鶴岡市長 皆川 治



表明の動画

ラムサール湿地近接風車建設に反対する会 事務局 担当 佐久間 090-5842-1115

〒997-1124 山形県鶴岡市大山 2-19-19 Eメール ooyama@yamagata-npo.net

蔵王に「地蔵山」と「地蔵岳」の2座?!

会員番号 7734 木村 喜代志

美しさのあまり自然の驚異を感じる蔵王の樹氷は、地蔵西斜面に顕著に発達する。特殊な自然条件が重なり生み出される貴重なもので、山形市や県に留まらず日本の、世界の宝物である。ところが、近年樹氷を形成するオオシラビソが立ち枯れ、倒木が目立ち、樹氷消滅の恐れが心配されている。オオシラビソの再生、温暖化による樹氷帯の変動なども加わり、今後、地蔵が話題になることが多くなると思われる。

ところが、最近の国土地理院発行 1/2.5 万地形図や蔵王観光協会スキー場案内図（2022-23）を頼りに「地蔵岳」山頂に立つと、「地蔵山」の道標が建っている。昨年、山形で『第6回「山の日」全国大会やまがた 2022』が開催された。パンフレット等の印刷物は「地蔵岳」で統一されていたが、記念登山会場である蔵王の地蔵山頂の道標は「地蔵山」のままであった。

先年、蔵王の火山活動が活発化した時、蔵王山の読み方「さん」と「ざん」が問題になった。あの時は、読み方の違いでだれしも一つの山と理解していた。しかし、山名が「山」と「岳」では全く異なる固有名詞になるので二つの山と理解されかねない。山名は、古人が想いをこめて名付けた民俗学、歴史学的な固有名詞であり、ある種の文化遺産でもあり、敬意をもって接するべきものだと思う。

山に親しみ始めた高校の頃より、地形図の「地蔵山」として認識してきた。ところが、近年「地蔵岳」の印刷物を目にするようになり気になっていた。新聞に掲載された今年の県立高校入試問題に「地蔵岳」の地形図があり、国土地理院 1/2.5 万 蔵王山から作成とあった。手元にある 1/2.5 万地形図（平 13、2001）を開いてみたら「地蔵山」である。三省堂の「コンサイス日本山名辞典」（昭 54、1979）、「角川日本地名大辞典 6 山形県」（昭 56 年、1981）、山形県総合学術調査会「蔵王連峰」（昭 60、1985）、日本最初の山岳辞典「日本山嶽志」（明 6、1906）の改訂版である日本山岳会編著「新日本山岳誌」（2005）、「山形県地学ガイド」（山形応用地質研究会編 コロナ社 2010）、「山形県の歴史散歩」（歴史散歩編集委員会編 山川出版 2011）も「地蔵山」である。

いつから、どのような経緯で「地蔵山」が「地蔵岳」に変更になったのかを国土地理院に問合わせたところ、「地形図に掲載している山名などの自然地名は、地方公共団体から地元での呼称を申請いただき、この申請に基づき、2013 年発行の 1/2.5 万地形図から「地蔵岳」へ変更しております」の回答を得た。その後、県庁と山形市役所を訪ね、山形と上山両市が合同で 2006 年に変更申請したことを知った *1。

*1 平成 18（2006）年、山形市役所と上市市役所から国土地理院に申請（申請資料は保存期間を過ぎたため山形市役所に現存していない） 23/5/23 市役所「観光戦略課」工藤係長より電話回答

先の蔵王山（ざん）（さん）の読み方の時は、マスコミを通して県民が広く認識していた。ところが、「地蔵山」から「地蔵岳」への山名変更の動きや変更申請に伴うニュースが、市民や県民の間で話題になった記憶は全くない。仲間に尋ねてみても同じである。加えて、変更後の広報活動を見聞したこともない。「山」から「岳」にわざわざ変更する理由は何だったのだろうか。

山形市役所によると「地蔵岳」の根拠となったのが、明治17年（1884）参謀本部測量局（後の陸地測量部）発行1/20万地勢図とのことであった*2。

*2 明治17年（1884）参謀本部測量局（後に陸地測量部に変更）の「地蔵嶽」に準じて呼称変更申請 「まちづくり政策課」沼澤課長補佐から回答 23/5/29

スキーによる最初の蔵王越えとされている大正10年（1921）慶応義塾大学山岳部の記録、昭和7年（1932）発行の「蔵王山、雁戸・龍山案内図」も「地蔵嶽」である。ところが、1961年発行の山形宮城両県共同の「国定公園候補地蔵王連峰案内図」では「地蔵山」と記されている。これらから推測すると、「地蔵嶽（岳）」から「岳と山」の併存期間を経て、近年は「地蔵山」主流へと変化していたと考えられる。

蔵王は火山活動時期や地理的に北蔵王、中央蔵王、南蔵王などのブロックに分けられる。熊野岳や刈田岳と共に地蔵山も中央蔵王に入る。熊野岳と刈田岳は馬の背で連なっていることから「岳」の名称が相応しいが、地蔵山は熊野岳などより古い火山で、独自の溶岩円頂丘とされているので地質、地理的にも「山」がそぐわしいように思う。

蔵王ロープウェイ山麓駅前に20年以上前に設置されたという「蔵王夏登山案内図」がある。これには「地蔵山」と記されている。蔵王ロープウェイ地蔵山頂駅と蔵王地蔵尊の間に環境省、山形県、東北森林管理局による多色刷りの大きな「蔵王国定公園案内図」がある。これには「地蔵山」の他に英語表示もあり Mt. Jizo、熊野岳は Kumano Peak で、「山」と「岳」を明確に区別している。この設置が、「地蔵岳」になってから4年後の2017年である。いまだに「山」と「岳」が入り混じっているということは、地名（山名）変更の難しさを物語っている。

蔵王は山形県の山というより日本の、世界の蔵王である。山名変遷の歴史を踏まえて山名と案内図や道標などの表示が統一されることを山形市と県にお願いしている。また、もし、今の地形図の地蔵岳に統一された場合、過去の多くの印刷物の「地蔵山」の取扱いはどうなるのだろうか。固有名詞の変更だけに今後も尾を引きそうである。（5/2023）

日本山岳会山形支部活動記録

2023（令和5）年4月～2024（令和6）年3月

事務局

2023年（令和5年）

4月8日（土）	2023年度日本山岳会山形支部総会（寒河江市ハートフルセンター）
4月22日（土）	月山春スキー（月山スキー場-金姥-石跳川-志津 9名）
5月20日（土）	蔵王地蔵山害虫被害調査登山（蔵王温泉スキー場 ザング坂付近調査 12名）
6月10日（土）	第1回支部役員会（ゆぽか）
6月17-18日（土日）	宮城支部との交流会（宮城支部主催、山の天気ライブ授業、山形支部 6名） 遠刈田地区公民館（蔵王町）、遠刈田温泉（泊）、馬の背～刈田岳
7月1-2日（土日）	東北北海道地区集会（青森支部、八戸プラザホテル、階上山、山形支部 10名）
7月8日（土）	道智道調査（白鷹町黒鴨集合後、荒天のため中止 5名）
8月29-31日（火水木）	それぞれの上高地（北アルプス上高地、山研 10名）
9月16日（土）	道智道調査（白鷹町黒鴨-茎の峯峠-朝日町木川 4名）
9/30-10/1（土日）	公益清掃登山・芋煮会（西浜キャンプ場コテージ 16名） 清掃登山（鳥海山・笹ヶ岳）中止、丸池様散策等
10月21日（土）	第2回支部役員会（寒河江ゆ～チェリー）
11月3-4日（金土）	支部晩餐会（あつみ温泉瀧の屋、19名） 記念登山：日本国（3日）、摩耶山中止
12月2日（土）	本部年次晩餐会 大場貞吉会員、永年会員表彰

2024年（令和6年）

1月23日（火）	学校から見える山「朝日連峰・月山・葉山」展望図を山形市立楯山小学校6年生32名に贈呈。鈴木理夫支部長、講話。
1月23-25日（火水木）	樹氷原を滑る会（蔵王温泉スキー場、ル・ベール蔵王泊、11名）
2月24日（土）	第3回支部役員会（寒河江市体育館）
3月16-17日（土日）	天元台を楽しむ会（天元台スキー場、米沢山の会大笠山荘泊、12名）

支部会員の活動状況（2023 年度）

- @ 荘内日報（4/14 '23 付） 梅本会員（12118）が代表の「庄内チューリップ倶楽部」主催の「チューリップまるしえ」開催 場所：いこいの村森林公園（鶴岡）チューリップ 150 種、約 35,000 球の花が咲き競う。佐藤（映）会員はボランティアで活動
- @ 5/14 '23 庄内地区高校総体登山大会で鈴木理央支部長が講話「万助小舎について」
- @ 6/4 '23 山形県高校総体登山大会で鈴木理夫支部長が講話「鳥海山について」
- @ 2023 年度 新永年会員 大場貞吉会員（7591）（1973/5 入会）
- @ 荘内日報（6/16 '23 付） 梅本会員（12118）が「おうらの里おおやま再生プロジェクト」代表として、鶴岡市加茂地区風力発電事業ガイドライン見直しを市に要望
- @ 日本山岳会創設 120 年記念行事「古道調査」関係（6/22 '23）
5, 60 年前、第 6 師団神町駐屯地によって「朝日軍道」の踏査が行われた。この報告書の有無について山形新聞社 鈴木 論説委員長を通して自衛隊に問い合わせていただいた
- @ 荘内日報（7/9 '23 付） クマのクロちゃん（32 歳） 安らかに眠る 野堀前支部長の時、山形大学実習林でブナ的美林と動く樹木などを探索後、上名川で保護飼育していたツキノワグマを見に行った
- @ 山形新聞（7/14 '23）木村喜代志会員（7734） 提言「蔵王の山名表示一つに」 が山形新聞に掲載
- @ 山形新聞（9/3 '23） 木村喜代志会員（7734）の「地蔵岳？地蔵山？ 蔵王連峰 地形図と看板、呼称が混在」 が掲載
- @ 鶴岡市芸術祭（10 月～11 月）梅本（12118）、佐藤（一）（15785）会員の水墨画、梅本会員の琵琶、瀬川会員の写真など多面にわたり活躍
- @ 10/16 '23 梅本会員（12118）が中心となって「ラムサール湿地の近くに風力発電はいらない」運動が実り、ジャパン リニューアブル エナジーによる加茂風力発電事業が撤退決定しました
- @ 10/22 '23 村山市議会議員選挙で田中洋子会員（11762）夫君が当選（二期目）
- @ 荘内日報（12/22 '23） 訃報 高橋 英彦氏 旧山形支部会員（5194）11/12 '23 逝去 東北公益文科大学名誉教授
- @ 荘内日報（2/27 '24） 木村喜代志会員（7734）の「紀行文で綴る世界の地誌」181 回 第 3 章 6 節 南米の国々 アルゼンチン（7）が掲載。

- @ 荘内日報（3/1 '24） 庄内初の中高一貫校「県立致道館中学・高校」発足前に、河口昭俊会員（15525）他 1 名執筆の『山形県立鶴岡北高等学校 127 年史』発刊

<付記>これらの記事は、会員からの情報提供を受け、山形支部の活動ではなく、会員個人の活動の記録をまとめたものです。掲載の基準は特に設けていませんが、記録として残したいものを選びました。今後とも皆さんの情報提供、よろしく願います。

（編集担当）

